

男性の一人称代名詞の地理的分布

—『方言文法全国地図』を用いて—

小 島 裕 将

1 はじめに

一人称代名詞についての先行研究は、池上（1972）、荒木（1998）のように中央語を通史的にとらえたものや、木川（2011）のように一つの共通語形に着目したもの、また郡（2003）など一つの地域の方言使用実態について述べたものなど、多岐にわたる。しかし、一人称代名詞の全国的な分布を分析したものは管見の限りみられない。

一人称代名詞を調査した全国的な資料として『方言文法全国地図』が挙げられる。『方言文法全国地図』（GAJ）は国立国語研究所が1979-1982年に調査を行い、1989-2006年に刊行された文法事象に関する全国規模の言語地図である。調査者73名の質問法調査によって、調査地点数807、調査項目数267からなる350枚の言語地図が作成された。女性の使用語形は調査していない。話者生年は1891-1931年であるが、うち1899-1921年が主で、約92%を占める。GAJについては回答数と都道府県の境界が重なるとする小西（2007）や、共通語形の分布パターンの分析を行った鎌水（2007）のように、GAJそのものについての研究やGAJを利用した研究、各図の分布パターンの分析など、様々な研究がなされているが、一人称代名詞の図を直接扱ったものはない。

本稿はGAJにおける一人称代名詞の分布を対照・分析し、その特徴を明らかにすることを目的とする。一人称代名詞の項があるGAJ第6集は「表現法3（待遇）」であり、あらたまり度の異なる三場面が用意されているものを含む。これを分析することによって、待遇価の違う一人称代名詞の分布や、使用される一人称代名詞のバリエーションを明らかにすることができると思う。

2 分析・考察のための手続き

本稿では音韻上の変異や歴史的関係などを考慮して、原図の見出し語形を統合した略図を作成し、その略図に基づいて分析・考察する¹。

一人称代名詞について調査されているのはGAJの第13、338、340、341図である。それぞれの質問文を次に記す。第338、340、341図は番号とは逆順で示している。

- ・第13図「『それはおれの手拭だ』と言うときの『おれの手拭だ』のところはどのように言いますか。」
- ・第341図「親しい友達にむかって、『この傘はくおれのだ』と言うとき、『おれのだ』のところをどのように言いますか。」（O場面）
- ・第340図「近所の知り合いの人にむかって、ややていねいに言うときはどうですか。」（A場面）
- ・第338図「この土地の目上の人にむかって、ひじょうにていねいに言うときはどうですか。」（B場面）

¹ 略図作成においては、国立国語研究所による『方言文法全国地図』のデータおよびプログラムを利用した。

GAJ で設定されている O・A・B 場面それぞれの場面設定を次に示す。

- ・O 場面（親しい友達に向かって言う）
- ・A 場面（近所の知り合いの人に向かって、やや丁寧に言う）
- ・B 場面（土地の目上の人に向かって、非常に丁寧に言う）

これらの場面設定について、A・B 場面はインフォーマントが設定を解釈する際に幅が生じる可能性がある。「近所の知り合いの人」の扱いに地域差や個人差がある場合、インフォーマントによる A 場面の認識は、O 場面に近かったり、逆に B 場面に近かったりすることが考えられるため、単純に O 場面と B 場面の中間とはいえず、同じ場面の中でもあらたまり度が異なっている可能性がある。

また、B 場面はあくまで「土地の目上の人に向かって」であって、発話の対象が知らない土地の人ではないため、共通語形志向であるかどうかかわからない。3 つの場面の中では最もあらたまった形式ととらえられるが、共通語形や地元のあらたまった言葉など、同じ場面設定においてもあらたまり度が異なる語形が回答されていることが予想される。

以上のようなインフォーマントによる質問文の認識の問題については確かめることができないため、本稿では O 場面、A 場面、B 場面に一応の段階性があると認め、調査結果を分析することとするが、同じ図にあらわれる使用語形どうしの待遇価が同じではないことには留意しておく必要がある。

第 13 図にはくだけた形式の一人称代名詞の分布が現れており、第 341 図のものと概ね一致するため、本稿では第 341 図（O 場面）、第 340 図（A 場面）、第 338 図（B 場面）を分析・考察の対象とする。

略図の見出し語形は以下の通りである。「見出し語形←GAJ 調査で得られた語形」の形式で示す。

オレ	←ore,oree,oregain,orenoe,oren,oen,orenouzi,orenjaee,oredogo,orendoko,oretoko, oreε,oreεε,oe,oeto
オラ	←ora,oradogo,orae,oraε,orai,oraho,ura,orja,ra
オル	←oru
オリ	←ori,worī
オイ	←oi,oija
オ	←o,og,oga,odon
オン	←on
ワタクシ	←wadakusi,wadagusu,watakusi,watakusu
ワタシ	←adai,adasi,assi,atahi,atai,ataki,atasi,atei,otai,otasi,waasi,wacci,wadasi,wadassja, wadasu,watahi,watasi,watasinouci,watasingtoko,watasitoko,watasu,watafi
ワシ	←asi,waci,wasi,wasidomontoko,wasiku,wasirauci,wasige,wasindoko,wasingtoko, wasitoko,wasitoo,wasu
ワイ	←wai
ア	←a,aa,aga
ワ	←wa,waa,wān,ba,baa
ワレ	←ware,wac
ウチ	←uci,ucinku,uzi

ボク	←boku,bogu
ジブン	←zibun,zubun
テマエ	←temae
ギラ	←gira
ゲ	←ge,gee
ン	←N
ミ	←mi

「ワタシ」と「ワシ」は、「wacci」や「waasi」など、どちらの語形として認定するか判断に迷うものがあつたが、本稿においては拍を基準とし、一人称代名詞の拍数が3であれば「ワタシ」、2であれば「ワシ」として認定した。また、「wasidomontoko」など、回答語形が「一人称代名詞+自分の家を指す語」となっている場合も一人称代名詞と思われる部分のみの拍数によって認定を行なつた。

3 各場面における一人称代名詞の分布

3-1 O場面における一人称代名詞の分布

図1はGAJのO場面における一人称代名詞の分布である。「オレ」は瀬戸内地方及び沖縄周辺を除いた日本全国に広く分布している。「オレ」の地点数は調査地点全807地点中435地点にもものぼつており、認定語形の中で最も使用地点数が多かつた。また、鹿児島県の「オイ」は後藤(1983)、熊本県北部と天草地方の「オル」は原田(1955)、宮崎、大分、福岡、長崎県と九州の北部から東部にかけての「オリ」と九州地方の「オ」は『日本方言大辞典』の「音韻総覧」、房総半島南部の「オ」は中條(1973)、中部地方から関東地方の「オン」は馬瀬(1958)が示すそれぞれの地域の音韻体系によって「オレ」が転訛したと考えられる。また、「オラ」は四国地方と北陸地方にみられる。

「ワシ」は瀬戸内地方にみられ、「オレ」と相補的な分布になっている。地点数は「オレ」に次ぐ多さで、126地点存在している。「ワイ」は淡路島を囲むように分布している。

「ワ」が青森と沖縄、奄美地方および八丈島に分布している。山田(1954)は古代日本語(奈良時代の日本語)の代名詞について、「わ」「われ」はこの時期[引用者注:「萬葉期」]を距る遠からぬ時代に発生し、この期に至りて勃興の運にむかへるもの」としている。青森県には「ワレ」もある程度の分布がみられることから、主に奈良時代に中央で用いられた日本語がこの地域に残っていると考えられる。

「ア」は宮古島、与那国島と八丈島に分布している。村山(1968)は「原始日本語は、一人称代名詞として*a、*na、*mi、*baをもっていたようです。」²と述べており、この場合も古い中央語の語形が現代に残っていると云える。

以上のように、O場面では、ワシ系(ワシ、ワイ等)の分布域の周囲にオレ系(オレ、オラ、オン等)が分布し、オレ系の分布域の周囲にワレ系(ワ、ワレ等)が分布しており、基本的にABCBA型の周圈的な分布となっていることが確認できる。一人称代名詞「ワ」が使用されるようになった

²「原始日本語」が具体的にどのあたりの年代を指すのかについては説明されていないが、古代日本語を奈良時代の日本語と定めていることから、それ以前であることは確認できる。

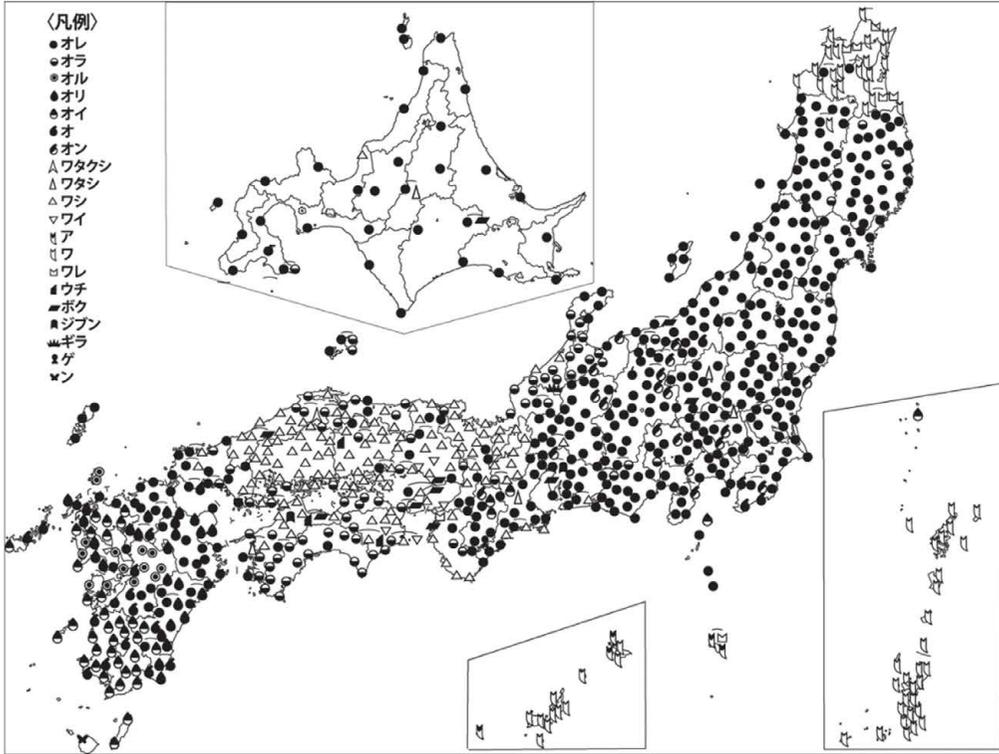


図1 GAJ (O場面) 一人称代名詞分布

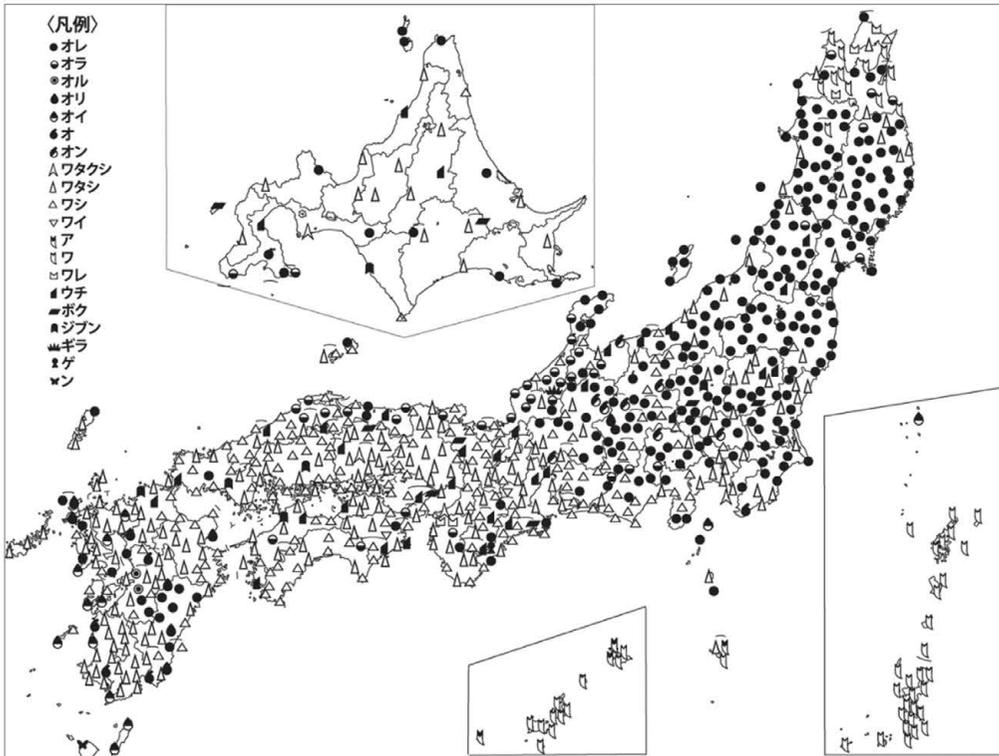


図2 GAJ (A場面) 一人称代名詞分布

のが奈良時代（山田 1954）、「オレ」がみられるようになったのが中世（荒木 1998）、「ワシ」が近世前期（湯沢 1955）であるため、分布の中央の語形ほど新しく生まれた語形であるとする方言圏論にも沿う周圈的分布となっている。また、「オラ」は四国地方と北陸地方にみられ、「オレ」と「ワシ」の分布域の間に位置しているようにもみえる。『日本国語大辞典』第二版によると「オラ」の初出は 1660 年（狂言記・『苞山伏』）であり、「オレ」は初出が 1254 年（『古今著聞集』）であり、「ワシ」は初出が 1714 年ごろ（浄瑠璃『当麻中将姫』）であるため、「ワシ」に明らかに近い時期の初出ではあるものの、一応は「オレ」と「ワシ」の間であり、文献上の出現時期と方言分布とが対応している。

3-2 A 場面における一人称代名詞の分布

図 2 は GAJ の A 場面における一人称代名詞の分布である。オレ系の語形の地点数は O 場面よりも減少しているものの、東日本には根強く残っている。「オレ」以外のオレ系の語形も O 場面よりも減少している。

「ワタシ」は O 場面よりも明らかに使用が多くなっている。O 場面で「ワタシ」が見られたのは 6 地点であったのに対し、A 場面では 216 地点にまで増加している。分布は近畿地方から九州地方まで連続している。「ワタシ」は鹿児島県にまとまって分布している「アタイ」の他は統合する前の語形でもほとんど「ワタシ」であり、現在標準語形として認められる「ワタシ」が西日本由来のものであったことがうかがえる。

「ワシ」の分布は O 場面にはみられなかった中部地方や九州地方、四国南部にまで広がる一方、O 場面で分布がみられた瀬戸内地方ではやや地点数が減少している。祁（2007）は近世中期上方語では目上に対する一人称代名詞であったが、明治 30 年代からは敬意を表す用法がなくなったと指摘する。GAJ のインフォーマントの基本生年は明治 32 年からである。瀬戸内地方で地点数が減少し、その周辺地域では増加していることから、「ワシ」は周圈的に伝播し、伝播が遅かった地域ではあまり待遇価が下がっていないと考えられる。

3-3 B 場面における一人称代名詞の分布

図 3 は GAJ の B 場面における一人称代名詞の分布である。「オレ」は O、A 場面よりも分布地点数が減少しているものの、東北地方を中心として東日本には分布している地点が多くみられる。塩澤（2001）は近世中期上方語において「オレ」が同等、目下に対して使用する語であったとするが、東日本ではあらたまった場面でも「オレ」を使用することがわかる。

「ワタシ」は 807 地点中 423 地点に分布している。216 地点であった A 場面よりもさらに多くなっており、西日本はほぼ「ワタシ」一色になっている。また、A 場面ではあまりみられなかった東日本にも「ワタシ」が多くみられるようになり、全国的に分布している。大槻文彦によって明治 22-24 年に刊行された『言海』には「わたし」の項に「馴レ親ミ用キル」とあり、大正 5 年に刊行された『口語法』にも同輩又は同輩以下に対して用いる語として「わたし」が挙げられている。「ワタシ」は標準語では待遇価の高い語ではなかったが、方言においては高い待遇価を持つ語としてとらえられていたことがわかる。

「ワシ」は中部地方にはまとまってみられるものの、全国的には少なくなり、O、A 場面よりも地点数は減少している。東日本では「オレ」、西日本では「ワタシ」が使われている場合が多いが、中部地方は「ワシ」が伝播しているために「オレ」よりも丁寧な場面で使用する語形をもつが、伝

播が遅かったために待遇価が高く、「ワタシ」に対抗できたと考えられる。

「ワタクシ」はO場面で1地点、A場面で5地点にみられたのに対し、B場面では47地点にもなっており、非常に待遇価の高い語形としてとらえられていたことがわかる。また、全国的に分布がみられ、地理的な偏りがないことから、標準語的性質を有していると考えられる。池上(1972)は室町時代に「ワタクシ」が一人称の代名詞として用いられるようになったと述べる。福永(1958)も指摘するように、「ワタクシ」から「ワタシ」が生まれ、「ワタシ」から「ワシ」が生まれており、「ワタクシ」はこれら三語形の中で最も古くから使用されていた。しかし、A場面でも多く使用がみられた「ワタシ」や、O、A場面で多く使用されていた「ワシ」と比べると、その使用場面は明らかにB場面に偏っており、非常にあらたまった場面でしか使用できない、待遇価が最も高い語形であるといえる。これは古い語形ほど待遇価が下がるという一般的な通則から外れるものである。「ワタクシ」は一人称代名詞として使用されるようになった室町時代から一貫して待遇価の高い語であり続けたようであり、GAJの調査時期を経て、現在までそれが続いているといえる。

4 一人称代名詞の待遇上の対立パターンの分布

4-1 対立パターンの認定

各場面で使用されている一人称代名詞の組み合わせの分布を見ることで、待遇上の対立の地理的特徴について考察する。GAJの調査から得られたO、A、B場面それぞれの使用一人称代名詞の組み合わせを一つの型・パターンとして捉えて集計すると、203種類の組み合わせがあり、それぞれに記号を与えて地図上に記すのは困難であった。これを改善するため、系統が同じ語形については統合した。具体的には「ワイ」を「ワシ」に、「ア」「ワ」を「ワレ」に、「オ」「オイ」「オラ」「オリ」「オル」「オン」を「オレ」に含めた。

語形の統合を行った後の組み合わせは計65種あり、うち10地点以下のものが49種112地点みられた。そこで、場面によって対立する語形を数(二語形の対立か三語形の対立か)に焦点をあてて対立パターンを認定した。二語形が対立する場合、OA場面对B場面か、O場面对AB場面かの違いは捨象した。例えばOA場面で「オレ」、B場面で「ワシ」という地点と、O場面で「オレ」、AB場面で「ワシ」という地点とは、ともに「オレ~ワシ」型とした。この処理が解釈に影響を与えていないかという点の検討は、4-3で行う。また、この方法によって型を統合した結果、地点数が少なかったもの(5地点以下)については今回地図上に記さないこととした。この基準によって除いたものは47種46地点存在している³。これらの地点は全体の地点数の5%程度と少なく、地理的な偏りも見られないため、解釈に支障をきたす可能性は少ないと考える。

さらに、一つの場面で複数語形を使用している地点がいくつか見られた。複数語形を使用する組み合わせは全く同じになることがほとんどないため、そのような場合は一地点の組み合わせを複数にして示すこととした。例えば、「O場面-A場面-B場面」が「オレ・ワシ-オレ・ワシ-ワタシ・ワシ」である場合には「オレ-オレ-ワシ」と「ワシ-ワシ-ワタシ」という二つの型で示す。その際にはなるべく語形の待遇価の序列の近いものを合わせるよう努めた。

4-2 一人称代名詞の待遇上の対立パターン

図4はGAJにおける一人称代名詞の待遇上の対立パターンの分布である。これをみると、一人称代名詞の待遇上の対立パターンに関しても、周圈的分布の要素がみられることがわかる。すなわち、

³同地点に複数の型が存在し、そのどちらも条件を満たさなかったものが3地点存在する。

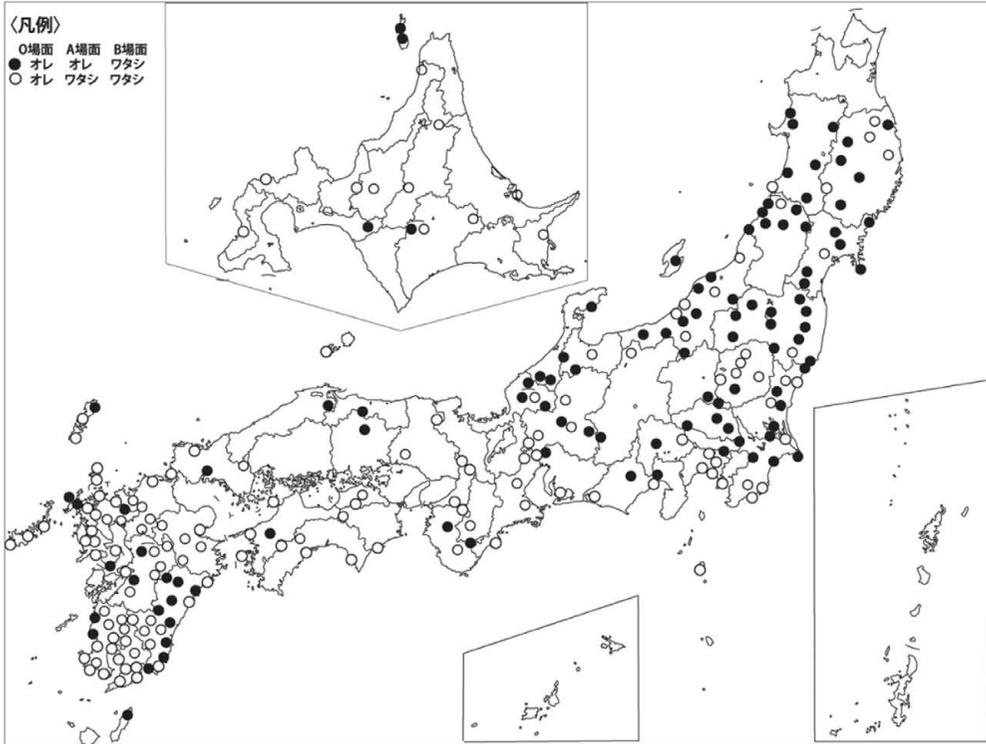


図5 G A J二語形対立分布（オレーワタシ）

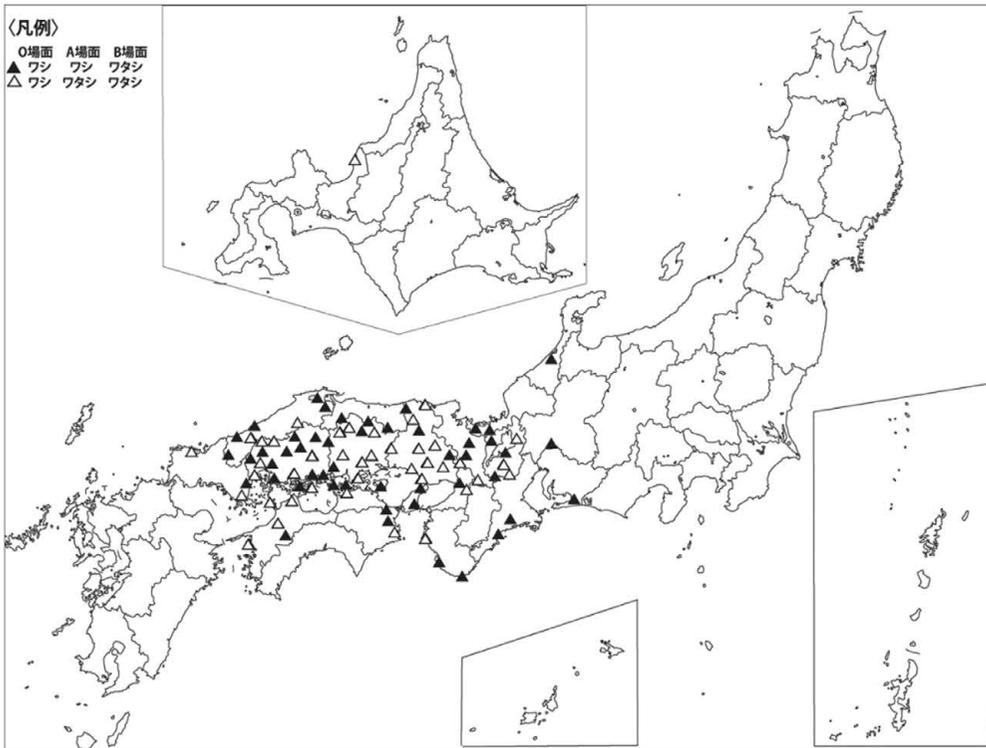


図6 G A J二語形対立分布（ワシーワタシ）

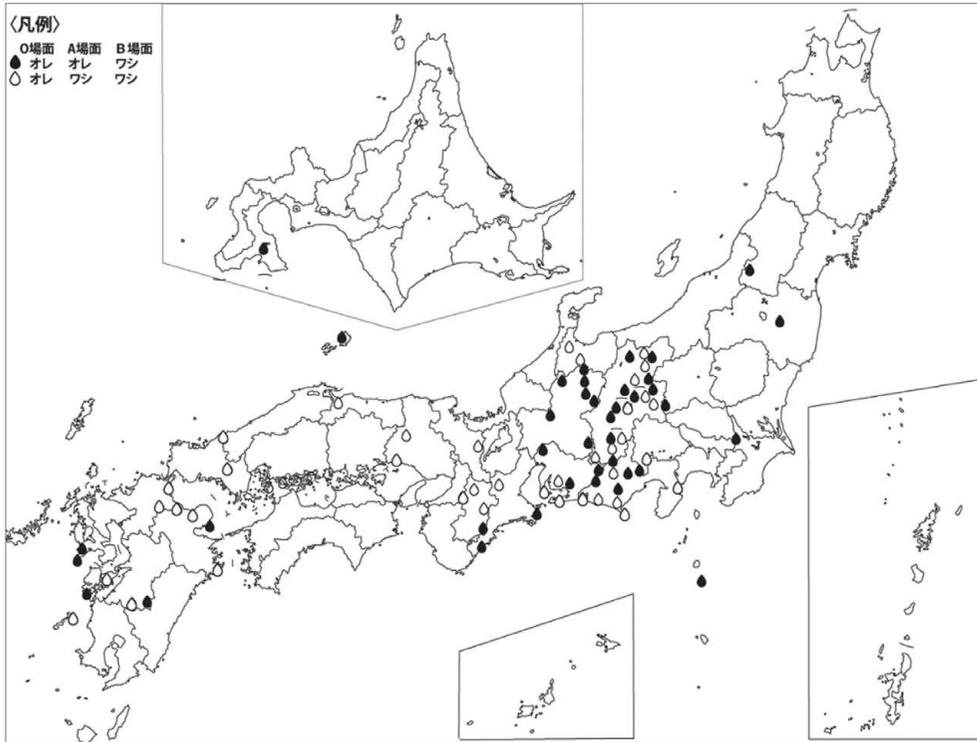


図7 G A J二語形対立分布（オレーワシ）

「オレ～ワタシ」、「オレ～ワシ」、「ワシ～ワタシ」が ABCBA 型の分布になっており、沖縄・奄美地方も含めれば最も外側に「ワレーワレーワレ」がある。基本的には O 場面の語形が周圈的分布を示しており、B 場面では全国的に「ワタシ」を使用しているために O 場面が周圈的分布であったという結果がそのまま組み合わせのパターンにも現れ、さらに、中部地方のみがあらたまった場面で「ワタシ」ではなく「ワシ」を主として使用するために、このような対立パターンの分布になったと言える。

また、周圈的分布だけでなく、東西対立の要素もみられる。「オレーオレーオレ」が主に関東地方と東北地方にみられ、西日本にはあまりみられない。ここから西日本では使用場面によって語形を変化させるのに対し、東日本では使用場面によって語形をあまり変えないという東西対立的な分布の傾向があると考えられる。西日本でも語形の切り替えがない「ワシーワシーワシ」のパターンが西日本の日本海側の一部にみられるが、大部分の地域では複数の語形を使い分けており、基本的には場面によって語形の使い分けを行うか否かという東西対立が存在するようである。

加藤（1973）は一般動詞について「西日本で尊敬表現が盛んなのに対して東日本ではあまり発達していない」と述べる一方、「自称代名詞に謙讓的な含蓄を見ることができよう。ただ、これには対称代名詞ほどのバリエーションはなく、謙讓ないし丁寧の語として標準語と同じ〈ワタシ〉が用いられる程度である」とする。場面による一人称代名詞の使い分けの有無という点で東西対立が存在することについて加藤が触れているわけではないが、この東西対立は尊敬表現における加藤の指摘に類似する。

4-3 二語形対立パターンの分布

4-2では二語形が対立しているパターンをまとめて示したが、先述したように、二語形が対立しているパターンにはOA場面对B場面の対立と、O場面对AB場面の対立が存在する。二語形間の対立はGAJの調査地点全807地点中472地点においてみられ、そのうち「オレ」と「ワタシ」の対立が241地点に存在し、過半数に及ぶ。次に「ワシ」と「ワタシ」の対立の89地点、「オレ」と「ワシ」の対立の80地点が続き、これら三つの対立で472地点の内の90%近くを占めている。上位三対立以外のパターンは地点数が少なく、地理的な特徴の有無を判断することができないため、示さない。

図5は「オレ」と「ワタシ」の対立、図6は「ワシ」と「ワタシ」の対立、図7は「オレ」と「ワシ」の対立の分布である。図5では東日本において、東北地方よりも関東地方に「オレーワタシーワタシ」がみられ、首都圏に近いほど待遇価が高い側の語形をA場面でも使用しているといえる。これは「オレ」と「ワタシ」の対立に限らず、図6では「ワシ」と「ワタシ」の対立において京都・大阪に近い山陽地方でO場面对AB場面の割合が増える。また、図7の「オレ」と「ワシ」の対立でも、名古屋に近い南側でO場面对AB場面の対立の割合が比較的高くなっている。これらのことから、都市部ほど、やや丁寧な場面であるA場面において、より丁寧な語形を使用する傾向にあることがわかる。

しかし、図5の九州地方においては都市部である福岡県に近いほどO場面对AB場面の対立が多いわけではない。宮崎県ではOA場面对B場面の対立が多いものの、鹿児島県ではほとんどがO場

面对AB場面の対立であり、九州全体としてもO場面对AB場面の対立が多くなっている。先述したように、GAJのA場面は「近所の知り合いの人」に話す場面であり、B場面は「土地の目上の人」に話す場面とされている。これが回答に考慮されていたとすれば、O場面对AB場面の場合は親疎関係を重視し、OA場面对B場面の場合は身分の上下を重視して一人称代名詞を選択していると考えられる。都市部では身分的な上下よりも親疎関係に敏感な傾向にあるが、九州地方は全域でその傾向が強いと言えるだろう。

5 まとめ

本稿により、GAJにみられる男性の一人称代名詞について、主に以下のことが明らかになった。

- 1) くだけた場面と待遇上の対立パターンにおいて、周圈的な分布を形成すること。
- 2) 「ワタシ」が西日本由来の一人称代名詞であること。
- 3) 一人称代名詞の使用において、場面による語形の使い分けが二語形で対立している場合、都市部ほど身分的な上下よりも親疎関係を重視する傾向にあるが、九州地方は全体的に親疎関係に敏感であること。

今回はGAJを対象として調査を行ったが、話者生年は主に1899-1921年であり、現代の状況はわからない。荻野(2007)が「ウチ」が首都圏の若年層に使用されていることを指摘しており、現代の一人称代名詞の使用状況はGAJの調査時期とは大きく異なっていることが予想される。新たな資料を用いた、GAJ以降の時代についての研究を行なう必要があるだろう。

参考・引用文献

- 荒木雅實（1998）「人称代名詞の史的変遷について」『拓殖大学日本語紀要』第 8 号
- 池上秋彦（1972）「代名詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 2 名詞・代名詞』明治書院
- 大槻文彦（1925）『言海』第 541 版、六合館
- 荻野綱男（2007）「最近の東京近辺の学生の自称詞の傾向」『計量国語学』第 25 巻第 8 号
- 加藤正信（1973）「社会生活と敬語」林四郎・南不二男『敬語講座 6 現代の敬語』明治書院
- 木川行央（2011）「一人称代名詞としての「自分」」『言語科学研究』第 17 号
- 祁福鼎（2007）「明治時代語における自称詞—その全体的様相—」『文学研究論集』第 26 号
- 郡千寿子（2003）「一人称代名詞の使用実態と使用意識について—弘前市の成人男女の場合—」『弘前大学教育学部紀要』第 90 号
- 国語調査委員会編（1980）『口語法・同別記』勉誠社
- 小西いずみ（2007）「方言文法全国地図をめぐる——『方言文法全国地図』の特色『方言文法全国地図』における回答語形数」『日本語学』第 26 巻第 11 号
- 国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図 第 1 集』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編（2006）『方言文法全国地図 第 6 集』国立印刷局
- 後藤和彦（1983）「鹿児島県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会
- 塩澤和子（2001）『古今集遠鏡』に於けるワシ・オレ』『文芸言語研究言語篇』第 39 号
- 尚学図書編（1989）『日本方言大辞典 下巻』小学館
- 中條修（1973）「房総半島方言の音韻の研究（1）」『静岡大学教養部研究報告 人文科学編』第 8 号
- 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編（2000）『日本国語大辞典』第二版、小学館
- 原田芳起（1955）「九州方言に現れた弱母音化通則（二）」『音声学会会報』第 87 号
- 福永静哉（1958）「「わたくし」とその子孫」『女子大國文』第 10 号
- 馬瀬良雄（1958）「木曾開田村方言の音韻」『国語学』第 34 集
- 村山七郎（1968）「原始日本語における人称代名詞 とくに一人称について」『ことばの宇宙』第 3 巻第 3 号
- 山田孝雄（1954）『奈良朝文法史』宝文館
- 鏈水兼貴（2007）「活用形における共通語の分布パターン 『方言文法全国地図』第 2・3 集データの多変量解析」『計量国語学』第 26 巻第 1 号
- 湯沢幸吉郎（1955）『徳川時代言語の研究 上方篇』風間書房

（広島大学大学院博士課程前期 1 年）